楓園

ISSUE 89
2020 1/31
FÛEN [フウエン]
Toyo Eiwa Jogakuin
Public Relations Report

[巻頭特集]

世界を「愛」でつなげていく

東洋英和の
国際交流

東洋英和女学院
東洋英和楓の会

135th Toyo Eiwa since1884

30th Toyo Eiwa University since1989

東洋英和の国際交流

世界を「愛」でつなげていく

東洋英和女学院では、「敬神奉仕」の精神のもと、創立当時から世界中で起こる問題に対して、誰かのために何ができるかを考えてきました。グローバル化が進む今、改めて英和の国際教育についてご紹介します。

2

1–2

花子よ、
これからの飛行機の
進歩は世界を平和に導くか、
戦争をもっともっと
悲惨にするか、どちらかです。
航空技術の発達によって
世界中の国々の距離がだんだんに短くなり、
各国の人々が頻々と行ったり来たりして、
その間の了解を深めることができれば、
戦争にならなくなるだろう
という希望も持てるのだが……。
我々人類はこの飛行機を
どういうふうに使おうとしているのだろうか？
平和か？　戦争か？
それは我々の上にかかっている
課題であることを、
あなたもよく考えておきなさい。

ブラックモア校長から花子へ

英和の上空をアメリカの飛行機が鮮やかに飛行する様子を眺めながら、ブラックモア校長が村岡花子にかけた言葉。人々には空襲というものさえ想像できなかった当時、ブラックモア校長の見識の高さと教育者としての信念、そして東洋英和の国際教育の原点が感じられる。

2

聖書の言葉

どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、
神があなたがたに望んでおられることです。

（テサロニケの信徒への手紙Ⅰ　5章18節）

新約聖書の「感謝する」という言葉は、ギリシア語「エウカリステオー」が使われることが多くあります。これは「聖餐（ユーカリスト）」を指します。十字架でイエス様の裂かれた体と流された血を記念するパンとぶどう酒を分かち合う聖餐式では、私たちの罪が赦され、救いの喜びと復活の希望、そして神の国に招かれていることを思い起こさせる恵みが注がれます。この神の愛に応答することこそ神様が望んでおられる「感謝」です。

中高部　聖書科　朴　洙美

1 東洋英和幼稚園／大学付属かえで幼稚園

園児も保護者も先生も みんなで盛り上げる国際交流

東洋英和幼稚園では、子どもたちがさまざまな国の洋服を着て、その国の色彩などを実際に見て楽しみ、みんなで踊ります。多様な世界を理解し、受け入れるための一歩です。（1-1）かえで幼稚園では、園が献金により支援するケニア・コイノニア・アカデミーを父母の会からも支えるため、保護者の方の作った製品をバザーで販売しています。（1-2）

2 小学部

英語による手紙交換を通して 隣国にできた大切なお友だち

大学間の交流をきっかけに2003年韓国の梨花女子大学附属初等学校（Ewha）との英語科のペンパルプロジェクトが開始され、以来、高学年による手紙の交換を行っています。英語による文通を通して、英語学習の一助になることはもちろん、異文化を理解し、お互いのペンパルのためにお祈りを送りあうなど、心のこもった交流が続いています。

3 中高部

パレスチナと英和をつなぐ 平和への願いを込めた凧揚げ

内戦が続くパレスチナのガザ地区では、毎年3月に東日本大震災の犠牲者追悼と被災者を激励するための凧揚げが行われています。厳しい状況下でも、遠い日本を気遣う彼らの行動に呼応し、日本各地でお互いを励まし合う凧揚げが広がっています。英和では2015年に中高部をガザ地区の子どもたちが訪問したことを機に、パレスチナへの思いを込めた凧を飛ばしています。

4 大学

自然災害の脅威を乗り越え 「復興」をお互いの理解の場に

海外研修として、2004年のインド洋大津波で甚大な被害を受けたインドネシア国アチェ州を訪問しました。災害や紛争からの復興に関わる研究者や実際に大津波を経験した大学生などから体験談や復興の道のりについてお話を伺い、「より良い復興」とは何かについて日本とアチェとの比較を通じて考える貴重な機会となりました。

Contents

P.01 ［巻頭特集］世界を「愛」でつなげていく

P.09 *From the Garden of Kaede* 楓の園から ［学院NEWS］

P.17 *Cartmell's Prayer* ［宗教教育委員会］

P.19 教員紹介

P.21 東洋英和楓の会

海外研修で気づいた
支えてくれる家族の「愛」

中高部
高等部３年
松原 羅美安さん

異文化にふれたいと参加したオーストラリア研修ですが、ホームステイ先のホストシスターはとても早口。英会話は好きでしたが、到着して間もない時は聞き取るのも大変で圧倒されました。けれど彼女の友人が遊びに来て、映画鑑賞を楽しみながら１日おしゃべりを楽しむうちに、リスニング力が一気に伸びました。また、ホストシスターと通った現地の高校には、授業の合間にスナックタイムがあります。大きなテーブルにお菓子を広げて皆で食べたり、私が得意なダンスを披露したり、同世代との交流はとても刺激を与えてくれました。私は東洋英和でいい友人たちとめぐり逢ったおかげで、人のことが大好きです。そのため、いろんな人と積極的に関わりたいと思ってきました。その思いは研修をきっかけに、海外の人とももっとつながり、言語を通じて理解し合いたいという気持ちに。さらに深い話ができるように、国際色豊かなオーストラリアの大学で、英語はもちろん、それ以外の言語も学びたいという目標ができました。その一方で、あらためて気づいたのは、今まであたりまえに受け止めていた家族の愛情です。留学のために支えてくれる家族に対し、いつか自立し恩返しをしたいと思います。

オーストラリア研修
（ブリスベン・Lourdes Hill College）

高等部１･２年生対象の短期留学制度。オーストラリアのブリスベンにある Lourdes Hill College で、授業や課外活動に参加し、現地の高校生の生活を体験します。ホームステイ先は原則的に Lourdes Hill College の生徒宅で、その生徒がバディーとして日常生活を共にします。レベルの高い研修で、充実した２週間を送ることが可能です。

一緒に研修に参加した同級生とホストシスター。みんなと楽しむ休日。

家族として受け入れてくれた
ホストファミリーの「愛」

大学
国際社会学部 国際コミュニケーション学科３年
片桐 彩香さん

留学先で出逢った人々のあたたかさが忘れられません。仕事で疲れているのに、いつも宿題やプレゼンテーションの練習につきあってくれたホストマザー。夕食時に１日のできごとを尋ね、ニュースを解説してくれたグランドマザー。いつも一緒に過ごすよう配慮してもらえたので、お笑い番組を見て笑えるまでになりました。生活面でも、外国米が苦手な私に日本米を用意してくれ、好きな牛乳を常にストック。留学中に迎えた誕生日にはキャンプファイヤーをしながらマシュマロを焼くという思い出深いパーティーを企画してくれました。本当の家族のように迎え入れてもらえたのです。また、大学でラクロス部に所属している私は、留学先でも練習を続けるつもりでした。ところが、予定していた練習先はオフシーズンで活動休止中。ホストファミリーに相談するとあちらこちらに問い合わせて、活動中の地元チームを探してくれました。そのチームも私を快く受け入れ、必要な道具を提供してくれるなど、世代や人種を超えた優しさにふれました。留学中はお手伝いをして感謝の気持ちを示すよう心がけましたが、そこでいただいた思いやりを今度は私が周りの人々に与えられるようになりたいです。

語学留学（旧 海外実地研修）
（ホーソン・メルボルン）

国際社会学部の学生を対象にした留学プログラムです。条件を満たせば原則希望者全員が留学できます。オーストラリアのメルボルン大学と提携する語学学校ホーソン・メルボルンだけでなく欧米やアジア諸国から留学先を選択することもできます。留学期間は、２年次後期の１学期間で、留学をしても４年間で卒業することが可能です。

留学先に遊びに来た両親とホームステイ先のファミリーと一緒にディナー。

同じ地球で生きている
もう一人の友だちに「愛」を

大学付属かえで幼稚園
教諭
片岡 朝子さん

本園ではコイノニア・アカデミーに通う9歳のシェリフ君を支援しています。支援金は、子どもたちが焼いたクッキーの売り上げです。年長組がその役割を担い、毎月、誕生月の子どもたちが郵便局に行き送金します。卒園が近づき引き継ぐ際には、年長組の子どもたちが紙芝居を作って、年中組に説明しますが、一連の活動を子どもたち自身が行うことで、皆とても誇らしげな表情を見せてくれます。届いたクリスマスカードの英語を訳して伝えると、子どもたちは大喜び。遠いケニアで生きる「もう一人の友だち」とつながる瞬間です。私たちが、団体ではなく一人の子どもを支援するのは、漠然とした誰かではなく具体的に顔の見える誰かを支えたいからです。シェリフ君が健やかに学んでいることを祈り想いながら、「勉強の機会はあたりまえにあるものではない」という世界の現実を知り、日本にいても地球の向こう側とつながっていることを実感してもらえたらと思います。卒園した子どもたちも、クリスマスやイースターの礼拝に来ては、お小遣いから献金してくれます。「かわいそうだから」ではなく、「友だちのシェリフ君に」。それは子どもたちにとって貴重な経験となっていることでしょう。

国際支援
（ケニア／コイノニア・アカデミー）

コイノニア・アカデミーは、日本人の牧師夫妻がケニアに開設した幼稚園2年、小中高12年のキリスト教に基づいた一貫教育の学校。かえで幼稚園が交流を始めたのは、牧師夫人の市橋さら氏の講演に感銘を受けた2004年から。コイノニアの児童一人のスポンサーとなり教育支援を行う他、コイノニアの教員の研修も受け入れています。

支援するシェリフ君から届いた直筆のお手紙。みんなの宝物です。

文通から生まれた
おとなりの国との「友愛」

小学部
小学部6年
伊藤 真緒さん

私には、韓国にペンパルがいます。梨花女子大学附属初等学校（Ewha）の方々です。5年生の時、Ewhaの方々が私たちの学校を訪問してくれました。同学年なのに、みんな礼儀正しく、将来の夢がはっきりと決まっていることに驚きました。私のペンパルも来ていて、私の家にホームステイしました。海外の同学年の人と実際に会って交流するのは、私にとって初めてのことです。会話は英語でお互いに緊張してうまく話せませんでしたが、片言でも、日本の文化を尊重してくれる思いやりの気持ちが伝わりました。たとえば食事の時、韓国ではお茶碗をもたないそうですが、日本の文化に合わせてお茶碗をもって食べてくれました。また、私が手紙に何気なく書いた韓国のキャラクターのことを覚えてくれていて、そのぬいぐるみをプレゼントしてくれたこともうれしかったです。韓国と日本の関係悪化についてのニュースがよく流れますが、互いに歩み寄りたいと思っている人はたくさんいると思います。それはEwhaとの交流を通じてわかったことです。このつながりを大切にして、これからもお互いの国のよいところを伝え合い、いつか私も韓国に行ってみたいと思うようになりました。

海外姉妹校との交流
（韓国／梨花女子大学附属初等学校）

小学部では、韓国の梨花女子大学附属初等学校と姉妹校提携を結び、互いに行き来をする国際交流を行っています。5年生から手紙交換（ペンパルプロジェクト）を行う他、2009年度より毎年交互に訪問するようになりました。2019年度は韓国の児童が来日。浴衣やけん玉など日本文化にふれ、ホームステイや観光を楽しみました。

ホームステイにも来てくれたペンパルの男の子と折り紙体験。

グローバルな世界を生きる 21世紀の子どもたちへ

各国との緊張した外交関係が続くなか、日本の若い世代はどのような考えを持っているのでしょうか。「戦争と記憶」をテーマとしたグラック教授との対話から、視点を広げました。

コロンビア大学
キャロル・グラック教授来校！

Carol N. Gluck

コロンビア大学歴史学部教授（ジョージ・サンソム教授職※）。専門は日本の近現代史、国際関係史、歴史の記憶。主要著作は *Japan's Modern Myths: Ideology in the Late Meiji Period*（Princeton University Press, 1985）。最新の著作に、『戦争の記憶：コロンビア大学特別講義―学生との対話―』（2019年、講談社現代新書）、『歴史で考える』（岩波書店、2007年・2020年に改訂文庫版を出版予定）などがある。アジア学会元会長。現在はコロンビア大学のグローバル思想委員会の委員長を務める。

※ Sir George Sansom（1883-1965）は、英国人外交官であり日本史家、1940年代にコロンビア大学東アジア研究所の初代所長となる。ジョージ・サンソム教授職は、サンソム氏の業績を記念して創設された教授職。

対話を通じて歴史と記憶を探る アクティブラーニング型授業

学院創立135周年、大学開学30周年記念行事の一環として、コロンビア大学のキャロル・グラック教授を招いて行われた高等部3年生「日本史B」の特別授業。日本近現代史研究の第一人者であるグラック教授は、各国の学生との対話を通じて“歴史”と“記憶”の問題を探ってきた。生徒たちは、過去の出来事をどのような経緯でイメージし、韓国や中国と緊張した関係にある現在の事態を、80年近く昔の戦争という出来事とどのように結びつけているのか。同じくコロンビア大学の准教授であり、東洋英和の卒業生でもある日米関係が専門の彦谷貴子准教授のサポートで、47名が探究型の授業を体感した。

それぞれが考える「第二次世界大戦」

教授　第二次世界大戦にどのようなイメージを持っているかについて聞いていきたいと思います。

生徒　小さい頃は外国が悪いと思っていましたが、日本史を学んでから、何が悪いというより全員が被害者なんだなと考えが変わりました。

教授　誰に責任があるかというのは難しいですね。

生徒　戦争自体は良いものではないし、多くの犠牲者も出したけど、その後憲法が変わり、選挙権も変わり、世界が一歩進むにあたって、日本史上でも世界史上でも大きなきっかけになったことだと思います。

生徒　祖母や祖父に話を聞きたくても、彼らも幼くて記憶が曖昧で…。具体的に想像がつかないというのが正直なイメージです。小さい頃に貧しい思いをして、体もガリガリだったというのは聞いています。

原爆の教訓を伝える記憶

教授　映画『この世界の片隅に』は、戦時中の日本の日常生活について描いていましたね。この作品からは、どんな印象を受けましたか。

生徒　原爆のシーンが一番衝撃的でした。まちに焼け焦げた人がいて、

誰だろうと思ったら実は自分の息子だったというシーンがあって。今では想像もつかないようなことですが、北朝鮮のミサイル問題などがあるので、身近じゃないけれど身近なものだな、実際こういうことが起きてしまうのかもと怖くなりました。

生徒　やっぱり原爆のシーンが一番インパクトがありました。その恐ろしさを知っているのが日本だけなら、もっと世界に伝えないといけないし、知っている人たちがまだ生きているうちに、みんながもっと知ろうとしたほうがいいのかなと思いました。

教授　その通りで、あなた方のおじいさんおばあさんも体験していないくらいですから、他国の人全員が原爆について理解しているとは言えません。時と共に忘れられてしまいますから、日本が世界と教訓を共有することが大事ですね。原爆について、ほかにどうですか？

生徒　両親が長崎出身なんですが、祖母は満州にいて、原爆の影響を受けませんでした。祖父は長崎にいたので、そこで原爆症を患って、私が生まれる前に亡くなりました。祖父は亡くなる前に家族に宛てた手紙に、原爆がいかに自分たちの生活を狂わせたか書いていました。

生徒　曾祖父は、原爆が落ちた日に長崎に行く予定だったのですが、乗っていた軍艦の予定が変わってその日に着かないことになり、手前できのこ雲を見たそうです。遠かったので曾祖父は無事でしたが、ほかにたくさんの人が被害に遭ったことを忘れてはいけないと思いました。

教授　家族の話は、過去を知る重要な手段ですね。広島の原爆資料館や平和記念公園に行ったことはありますか？ どういう印象でしたか？

生徒　小さい頃に原爆ドームを初めて実際に見て、原爆が落ちたらこんなになるんだと思って、毎年、世界の人々が集まって祈りを捧げている重大さが身にしみてわかりました。

生徒　小学3年生のときに広島に行って、蝋人形が怖くてずっと忘れられませんでした。5年生のときに塾の授業でポツダム宣言を習った帰りに蝋人形を思い出して、帰れなくて親に迎えに来てもらうくらい怖かったのを覚えています。

戦争は、まだ終わっていない

教授　沖縄については、どんなイメージを持っていますか。

生徒　私が小学校低学年の頃は、観光地、リゾートのイメージでしたが、高学年で国内唯一の地上戦があったこと、兵士だけじゃなくて若い子たちもたくさん命を落としたことを知ってびっくりしました。基地については、なんで日本の領土なのにアメリカがいるんだ、自分勝手だなと中学の時は思っていましたが、高校になってそのおかげで日本が守られていることがわかりました。でも、沖縄の人だけにその問題を押しつけず、もうちょっとみんなで向き合っていくべきなのかなと思います。

教授　沖縄の人は、戦争に対する意識がまったく違います。沖縄にとって、戦争は身近なもので、高校生でも必ず戦争のことを知っています。テレビを見なくても、博物館に行かなくても知っているんですね。ところで、第二次世界大戦はいつ終わったかわかりますか？

生徒　1945年。

教授　沖縄の年表では違いますね。いつだと思いますか？

生徒　返還された年ですか？

教授　はい。1972年に返還され、今でも基地があります。だから同じ日本人でも、戦争がまだ終わっていないような感覚があるんです。

日韓関係と帝国主義時代

教授　韓国と日本との関係については、何を知っていますか？

生徒　日本が戦時中に韓国の人たちに対していろんなことを強制してきたことは、反省すべきことだと思います。でも貿易や経済のことを考えたら絶対仲良くしたほうがメリットがあると思うし、せっかく文化で盛り上がっているなかで、険悪な雰囲気になってしまうのは悲しいです。

教授　戦争以外で、韓国人にとって大切なことがありますね。

生徒　日韓併合？

教授　韓国から見れば、日韓併合ではなく植民地化、帝国主義の時代です。もう少し大きな文脈で見ると、他の国々も、19世紀から非常な勢いで植民地の膨張を行っていました。イギリスの植民地はどこにあったでしょうか？

生徒　インド。

教授　実はほかにもたくさんあります。1900年の世界地図を見てみると、世界の半分ほどはイギリスの植民地です。フランスも植民地をだいぶ拡大しました。どこでしょう？

生徒　アフリカ。

教授　イギリスとフランスがアフリカのほとんどの国を分けましたね。そしてオランダは、今のインドネシアを支配していました。19世紀の世の中では、そういう帝国をつくることが、近代という定義の一つだったのです。だからといって植民地化して良い訳にはなりませんが、そのような歴史的文脈があったんですね。日本も、日清戦争、日露戦争、日韓併合、満州事変と、少しずつ膨張して、大日本帝国をつくりました。ヒトラーは東ヨーロッパで大ドイツ帝国を、ムッソリーニはイタリアの帝国をつくろうとしたんです。第二次世界大戦は、国と国との間だけではなく、帝国と帝国の間で起きたものでした。では、第二次世界大戦の日本の敵はどこでしょうか。

生徒　アメリカ。

教授　真珠湾や広島ですね。ほかに日本はどこで戦いましたか？

生徒　マレーシアやインドネシア。

教授　日本がタイ以外の東南アジアをほとんど占領しましたね。でも戦争は、その前の1937年に中国で始まりました。中国をめぐる戦争で、日本がなかなか勝てなかったので、真珠湾攻撃があったのです。第二次世界大戦は日本にとっては中国が対象だったのです。私が長年の研究で学んだことは、どの国の近現代史もとても似ているということです。自国だけが特別と考えず、相手国の立場を想像することが大切です。

ドイツ

小野 美咲さん

2000 年高等部卒（小学部より）
メゾソプラノ歌手

国境を越えた音楽で人々をつなげ、オペラを身近に

レーゲンスブルク歌劇場の専属ソロ歌手を務めた後、フリーランスに。異国での活動にプレッシャーを感じても、作品を深く理解し客席と通じ合えた時、外国語や異文化の枠に囚われずに表現できた時に海外で挑戦してよかったと感じます。「音楽は国境を越える」と言いますが、異なる背景をもつ者を一つにつなげてくれるからでしょう。

歌劇場のオペラ舞台写真

スウェーデン

佐藤 園子さん

1977 年短期大学英文科卒
（中学部より）
コーディネーター、
翻訳家、ライター

文化の紹介で理解を促し 2 カ国間の距離を近づける

40 歳を過ぎてからスウェーデンに来て、言語と格闘しながら日本とスウェーデンのデザイナーや伝統的なテキスタイルの展覧会をコーディネートしたり、それらについて雑誌に記事を書いたりしています。両国間の相互理解に貢献できることは私にとって仕事のやりがい。今年はストックホルムで日本の大きなテキスタイル展も企画しています。

通訳・コーディネーターとして TV 取材に同行

世界で活躍する英和生！！

世界のさまざまなフィールドで活躍する英和の卒業生たち。
共通するのは、人と人、国と国との関係を大切に築こうとする姿勢です。
そんな愛ある活動に取り組む皆さんの声をお届けします。

スリランカ

宮澤 明希子さん

2005 年大学国際社会学部国際社会学科卒
日本国際協力センター
留学生事業第一部留学生事業課勤務

関わる人の人生を豊かに… その目標を叶えられた仕事

ODA の人材育成事業「人材育成奨学計画（JDS）」における若手行政官を対象とした奨学金プログラムで、着任国の開発課題に合った人材育成を行う仕事をしています。仕事を選ぶ際、私が考えたのは「関わる人たちの人生が豊かになるきっかけづくりができること」。日本に留学し、成長して戻ってくる JDS 生の姿を見るのが嬉しいですね。

スリランカ政府関係者との打ち合わせ風景

日本

本城（山田）美貴さん

1990 年高等部卒（小学部より）
外務省勤務

英和で培った人間性で世界を愛に包まれた豊かなものに

外務本省の他、これまでにスペイン、アルゼンチン、パラグアイ、シンガポールの各日本大使館に勤務してきました。仕事上、文化や言語、社会制度の違い等から難しい場面に遭うこともあります。それでも、英和で形作られた自分の人間性を通して、相手に日本のことや日本人の価値観を理解してもらい、信頼関係を構築できた時、達成感を感じます。

パラグアイ政府への文化無償協力の調印式

フランス

松本 有貴さん

2004 年高等部卒
経済協力開発機構（OECD）勤務

中立・公平な立場を活用して、よりよい社会づくりへ

パリにある OECD 本部にて国際貿易や政府補助金に関する調査・政策提言を行っています。国際機関という中立・公平な立場から、一国の意見に左右されずバランスを保つ難しさはありますが、よりよい社会づくりに向けた解決策を模索し具体的な提案ができることや、無国籍国際人とも言えるユニークな立ち位置で働けることが魅力です。

各国代表の集まる国際会議にて

ベルギー

川村 奈菜さん

1981 年大学付属かえで幼稚園卒
ヴァイオリニスト、
ベルギー王立モネ歌劇場アシスタントコンサートマスター、
ブリュッセルチェンバーオーケストラコンサートマスター

世界の子どもに音楽を届け 平和に貢献する活動を始動

日本ではクラシック音楽の演奏も鑑賞も金銭的ハードルが高く思われますが、ヨーロッパでは多くの市民に根づいています。私が主催する小編成オーケストラでも年に 3 ～ 4 回、小規模な演奏会を開催するようにしています。また、世界の子どもたちに音楽やアートを届けることで世界平和に貢献すべく、Yehudi Menuhin 財団との活動も始めました。

イタリア・ピエトラサンタの音楽祭にて

セネガル

宝田 あづみさん

1994 年高等部卒
外務省（在セネガル日本国大使館）勤務

相手を尊重することで よりよい外交につなげる

外交関係というと、日常生活とはかけ離れているように思われるかもしれませんが、国の基盤となる社会を作るのは人であり、人と人との関係が国と国との関係を作ります。文化や習慣が異なっても、約束を守る、相手を尊重するなどして人からの信頼を得ていくことはどの国にも共通し、そのようにして日本のファンを増やすことが私の仕事です。

日本政府の支援で建設された施設の開所式

エジプト

丸田 容子さん

2004 年高等部卒（小学部より）
UN Women（国連女性機関）
アラブ地域事務所勤務

女性難民を支援することで、聖書の言葉を実践する

女性への暴力を撤廃するための地域プログラムを作成し、プロジェクトに必要な資金調達やシリア女性難民の職業訓練など自立支援を行っています。国連の仕事は聖書にある「あなたの口を開いて弁護せよ　ものを言えない人を　犠牲になっている人の訴えを」と似ており、他者を思い、他者に奉仕できることにやりがいを感じています。

ヨルダン・ザータリ難民キャンプにて

ガーナ

牧浦 土雅さん

1998 年東洋英和幼稚園退園
Degas 株式会社 代表取締役

Change the world!　6億人の農業に貢献したい

13 歳で単身渡英し、以後、世界でさまざまな経験を積み、今はガーナを拠点に農作物の生産支援、流通、販売を行う会社を経営しています。この 100 年間変わらなかった現地農家の所得向上に寄与することがやりがいですが、今後も「Change the world!」を目標に、サブサハラアフリカ 6 億人の農業、そして国の発展に貢献したいと思っています。

Degas 社・ガーナ北部のスタッフと

From the Garden of Kaede

子どもたちの好きな場所の一つ“ままごと部屋”。
陶器のお皿や湯のみ、卓袱台、黒電話など畳の上で昔の暮らしを楽しんでいます。

東洋英和幼稚園

みみちゃんとようちゃん

花が咲き終わった花壇の土を掘っていると、年中組の子どもたちが数名「何やってるの？」と尋ねてきました。「何か出てくるかなと思って掘ってるのよ」と伝えると、「あっ！幼虫ね！」と子どもたちも仲間に加わりました。するとミミズが出てきました。「いたいた！」とすかさず虫かごに入れ、また掘りだしました。この日は、掘る度にミミズが出てきます。〝みみちゃん〟と愛着を持ち呼ぶようになり、見つける度に、「みみちゃんだ！」と声をあげています。虫かごはミミズだらけになりました。

しばらくすると、「ようちゃんだ！」という声が聞こえてきました。「ようちゃんって何？」「どこにいるの？」と一際目を光らせている子どもたち。そこには、幼虫がいたのです。1cm弱の小さな幼虫なのですが、子どもたちはその〝ようちゃん〟を大喜びで〝みみちゃん〟の虫かごに入れて、眺めていました。「これカブトムシの幼虫だよ！」と興奮気味に言う子どもたちの姿は微笑ましいです。虫に詳しい子どもが、「もっと（カブトムシの幼虫は）大きいんだよ！」と一生懸命言っていましたが、そうだと思い込んでいる子どもたちの耳には入りません。そのうち、あまりにもカブトムシだと言われ続けたせいか皆がカブトムシの幼虫だと思うようになっていました。そこに、別の虫好きの子どもがやってきて「だめだめ！一緒に入れると喧嘩しちゃう！」と急いでみみちゃんとようちゃんを別々の虫かごに移し始めました。子どもたちの中には「勝手にやらないで」と怒る子どももいましたが、理由を話すと「ようちゃん、みみちゃんのこと噛んじゃうものね」と納得していました。次の日からは、〝みみちゃん〟と〝ようちゃん〟のために二つの虫かごが準備され、それぞれの家ができました。けれども片付けの時間になると、「また明日ね」と花壇の土に戻してあげる子どもの姿は愛らしいものです。

毎日のように同じことを繰り返している子どもたちですが、どんなに小さな事でも新たに発見する喜びを友だちと共に分かち合う姿はこれからの保育でも大切にしたいことの一つです。

みーつけた

大学付属かえで幼稚園

砂と水と友だちと

かえで幼稚園には広々とした砂場があります。空が美しく晴れた秋の日、多くの子どもたちが裸足になり、ブルマース姿になって砂場へやってきました。一人でどろだんごやケーキを作る子ども、二人で山を作る子ども、数人で穴を掘る子どもなど、それぞれです。AちゃんとBちゃんはシャベルを持ってくると、堀を作り始めました。しばらくして、保育者が「長くなったわね。もう少しでCちゃんのところまでつながりそう」と言うと、Aちゃんはニヤッと笑い、近くで同じように堀を作っていたCちゃんに「つなげていい？」と聞きました。「うん」とCちゃんが頷き、双方から掘り続けます。やがて3人から「つながったよー」との弾んだ声が聞こえてきました。Aちゃんは「水持ってくる！」といって、二つのジョウロに水を汲み、両手に抱えて戻ってきました。それを見たBちゃんとCちゃんもジョウロに水を汲んできます。そして「いくよー！」と合図をし、水を流します。水は川のように流れ勢いで幅が広がっていきました。それを見て、近くでおだんごを作っていたDちゃんや山を作っていたEちゃん、Fちゃんも「入れて入れて」とやってきました。保育者が「みんなで流してみる？」と言いました。子どもたちは嬉しそうに頷きました。ジョウロやバケツに水を汲んできた6人が「1、2の3」と同時に水を流しました。3人で流した時よりもなお勢いよく流れ、水がたっぷりたまっていきました。子どもたちは楽しかったのでしょう。「もう1回やろう」「もう1回やろう」と何度も水を流していました。そして、次の日もその遊びは続いていました。

砂場は、一人でじっくりと遊ぶ場所でもあり、心を解放させる場所でもあります。そして、友だちとの関わりが深まる場所でもあります。ここでも、子どもたちは日々育まれています。

砂場で遊ぶ子どもたち

フィリピンスタディツアー

中高部数学科教諭　塩田 真理子

スタディツアーの始まり

今から約10年前の2009年、生徒会内で「創立125周年を迎えるにあたり、何か記念になることをしよう」という提案がされました。当時の高等部長の佐藤順子先生から「自分たちの中で完結する活動ではなく、学院が創立された経緯を覚えて対外的にできる活動をしてはどうか」という示唆を受け、生徒会役員を中心に議論が重ねられ、3つの方針に基づく活動を行うことに決まりました。

① 遙か遠いカナダからいらした宣教師の方々によって創立されたことを覚える活動

② 対外的な支援活動

③ 継続が可能な無理のない活動

この基本方針のもとに生徒たちが情報収集を行い、たどりついたのがアジアキリスト教教育基金（ACEF）によるバングラデシュ寺子屋活動でした。貧困により学校へ通えないバングラデシュの子どもたちのために、寺子屋を建てる取り組みを支援する活動です。2010年度に生徒2名、教員1名がACEFスタディツアーに参加することからこの活動が開始されました。帰国後、参加した生徒がバングラデシュの現状を全校生徒に報告し、創立記念日に各クラスで100円募金を実施しました。以降、高等部中央委員会の呼びかけで定期的に100円募金が行われ、生徒全員の協力を得て寺子屋1棟分の建て替え資金を寄付することができました。その後も建てられた寺子屋の見学と現状把握を兼ねて、2015年まで毎年スタディツアーに参加してきました。

フィリピンスタディツアーに至った経緯

2016年、バングラデシュの政情が悪化し、安全な渡航が困難になりました。そこで、高等部中央委員会が次の点に着目しながら、行き先や主催団体を再検討することになりました。

・生徒自身がコミュニケーションをとりやすい英語圏であること

・ツアーの内容が趣旨にあっていること

・安全な渡航が可能であること

・適切な時期であること

この4点に合致するツアーとして、最終的にFree The Children Japan（FTCJ）主催のフィリピンスタディツアーを選定し、2018年の3月から参加することに決定しました。FTCJは「子どもは助けられるだけの存在でなく、自身が変化を起こす担い手である」を理念とし、「貧困・差別から子どもを解放すること」をミッションとして活動している国際協力団体です。ツアー参加生徒の選出は高等部中央委員会が行っています。参加2回目となる2019年は3月25日から3月31日までの日程で、現高2生徒2名と高3生徒1名が参加しました。

フィリピンスタディツアー、スケジュールと生徒の思い

1日目 マニラ集合

2日目 先住民族アエタ族のコミュニティでホームステイ

村には、電気も水道も通らず、トイレは3つしかありません。小学校に通う子どもたちは多少英語がわかりますが、大半は身振り手振りでコミュニケーションをとりました。訪問した自分たちを温かく受け入れ、親しく交わり、たくさん話してくれました。子どもたちは自然と触れ合いながら遊びを作り上げるのが上手で、本来の子どものあるべき姿を感じました。村人たちが協力し支え合って生活する姿を見て、本当の幸せとは何かを考えさせられました。その一方、小学校に通えない子どもたちが多いですが、その子どもたちも教育を受けたいと思い、さまざまな夢を持っています。彼らの存在を多くの方々に知っていただき、支援を広げることが大切であり、彼らのライフスタイルや文化を尊重しながら、支援する方法を考えていかなくてはならないと思いました。

ホームステイ先のアエタ族のご家族と

3日目 Girls Home 訪問

Girls Homeは性産業や人身売買、DVから助け出された女子を保護する施設で、子どもたちはセラピーを受け、感情を吐き出すトレーニングをしながら、メンタル面のケアを行っています。現在加害者と裁判中の女子もいるため、SNSで画像を公開することは一切禁止でした。子どもたちとダンスやゲームを楽しみましたが、ツアーメンバーの男性を見

かけた途端におびえ、自分の後ろに隠れる様子に辛い過去と深い傷を感じました。

4日目 Boys Home 訪問

Boys Homeはストリートチルドレンや留置所にいた男子を保護する施設で、運営はGirls Homeと同じ団体ですが雰囲気と生活は異なります。電気関係や運転技術を習得できる場が施設内にあり、教育を行いながら将来安定した職業につけるように、職業訓練を課すなどの配慮がされています。男子と一緒にバスケットボールやバレーボールを楽しみ、手加減のないプレーに驚きましたが、私たちに向ける無邪気な笑顔に、皆普通の男の子なのだな、と感じました。

Boys Homeにて

5日目 Blind School 訪問

国内唯一の盲学校で、政府と協力して無償で行っているため、貴重な存在です。遠方からの生徒が大半で、7歳から親元を離れ寮生活をしています。このような学校が増えることを祈るばかりです。教育プログラムは一般の学校と同じで、卒業後は大学に行く生徒、働く生徒などさまざまで、先生を志望する子どもも多く、盲学校を卒業したことにより将来が狭まることはないように感じました。点訳の機械が不足しており、日本からも資金提供が行われています。

Blind Schoolの皆さんと

6日目 スラム地域訪問

スラム地域にある小学校を訪れた後、生徒の家庭を訪問しました。自宅に学力優秀のメダルがたくさん飾ってあり、努力家で子どもが大好きな女の子は「将来、学校の先生になりたい。でも中学校に行くことはできないからきっと先生になるのは無理だと思う」と言っていました。その子が幼い弟に向ける眼差しは優しく、将来良い先生になれるだろうな、と感じただけに、生まれた境遇で将来が決まってしまうという現実を突き付けられました。今回いろいろな地域を訪れ、さまざまな困難を感じましたが、前に向かうエネルギーや明るさも感じました。その中にあって、スラム地域は明日を見通せない、夢をあきらめなくてはいけない暗さが伝わり、負の連鎖が止まらない場所であると思いました。

スラム地域の少年たち

7日目 観光

目に映る海は美しいですが、観光客の増加や未処理の下水の影響で環境汚染が進み、入ることはできません。フィリピン歴史博物館ではフィリピンの文化と独立の歴史を学ぶことができ、良い経験となりました。

スタディツアーを終えて

スタディツアーを通して、教育問題、NGO支援のあり方、予算の使い方を考えさせられました。これをきっかけに、FTCJのユースメンバーとともにミンダナオ島の先住民族の子どもたちが通う小学校修繕のための資金を集めるプロジェクトに参加する行動力がつきました。クラウドファンディングで190万円を目標に寄付を募ったところ、目標額を超える200万円以上集めることができました。自分の環境が当たり前でないことを高校生の今、目にして感じられたのは大きな経験です。まだ将来の目標を定めてはいませんが、今回の体験が生きるような活動をしていきたい、と強く思います。

終わりに

スタディツアーへの参加は、募金という形で生徒全員が関わることができ、資金を出すだけでなく実際に現地を訪問し、さまざまな人々と交流し、その体験を報告するという形で皆に還元できます。活動方針の決定、参加団体・参加生徒の選定、全校への報告から募金集めまで生徒主体で進められていることも大切な点です。135年前にカナダからいらした宣教師の方々が多くの困難を乗り越え、自らを神に捧げて異国の地、日本の伝道と女子教育に力を注いでくださったことを覚える活動として、今後も継続されることが望まれます。

上／スラム地域にて
下／アエタ族の皆さんと

大学開学30周年

これからの30年

学長 池田 明史

東洋英和女学院の長年の夢であった四年制大学が産声を上げた1989年（平成元年）とこれに続く数年は、冷戦の終結やソ連邦の崩壊、そして湾岸危機・戦争など、大きな動乱の時代の始まりでした。大学のこれまで30年間の歩みはちょうど平成という元号のそれと重なりますが、この間、わが国内外では9・11国際テロといった人為的災害や、3・11大震災などの自然災害が「これでもか」とばかりに頻発しました。何よりも、構造的に進展する少子高齢化は、大学をはじめとする教育現場をいわゆる構造不況業種に変容させ、開学当初の環境は劇的に様変わりしています。それでも、この東洋英和女学院大学が現在までその命脈を保ち、時代と社会の要請に応えて多くの卒業生を送り出してきている事実は、それだけで自身を言祝ぐ理由になるのかも知れません。

6月29日に本学で行われた開学30周年記念行事に現職の文部科学大臣や事務次官からご祝電を頂戴し、また列席された地元出身の国会議員や地方議会議員の方々より懇切な慶祝の意を賜りながら、そのような思いが胸を過ぎりました。

また、9月7日には朝日新聞社との共催で朝日教育会議「教育格差を超えて未来をつくる」を実施しました。第1部の基調講演では脚本家の中園ミホさんに『花子とアン』の脚本に込めた想いなどを語っていただきました。第2部のパネルディスカッションでは、中園ミホさん、教育NPOカタリバ代表理事 今村久美さん、本学人間科学部 佐藤智美教授、コーディネーター朝日新聞社 木之本敬介さんが登壇し、「教育格差の現状と課題」「教育格差是正への具体的な取り組み」「教育格差を超えて女性が自立して働くには」などのテーマについて、それぞれの立場から現状報告や事例紹介などをお話しいただき、最後は「教育格差を超えるには」として、登壇者の方々から会場の皆様に向けてメッセージが伝えられました。現在の日本社会が直面している課題をテーマに突っ込んだ議論が展開されたのは嬉しい限りでした。

もとより、30年目という節目の年にあって、いま本学に求められているのは過去を懐古することではありませんし、現在を傍観し評論することでもありません。過去に責任を持つと同時に、現在の課題を見据えたうえでこれに的確に対応して行動を起こす喫緊の必要に迫られているのです。過去は変えられませんが、未来を変える責任は、現在に生きる私たちにあります。本学は、これから先の30年を見据え、NEXT30という名を冠した長期将来構想を策定しつつあります。6次にわたる5か年計画からなるこの構想では、ソフトとハードの両面からキャンパスを刷新し、新たな時代の新たな要請に柔軟に向き合うことのできる学生を育成する指針が示されることになるでしょう。その最初の5か年計画は2020年度から始まる予定です。そこでは、「敬神奉仕」という東洋英和女学院の建学理念を確実に受け継ぎ、これを堅持しつつ、そのうえで時代の要請に応える自己変革を成し遂げていかなければなりません。大学開学30周年記念行事でも式辞の最後に引用したアメリカの神学者ラインホルト・ニーバーの有名な祈りの言葉をここに繰り返して、この拙文を終えたいと思います。

神よ
変えることのできるものについて
それを変えるだけの
勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては
それを受けいれるだけの
冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、
変えることのできないものとを
識別する知恵を与えたまえ。

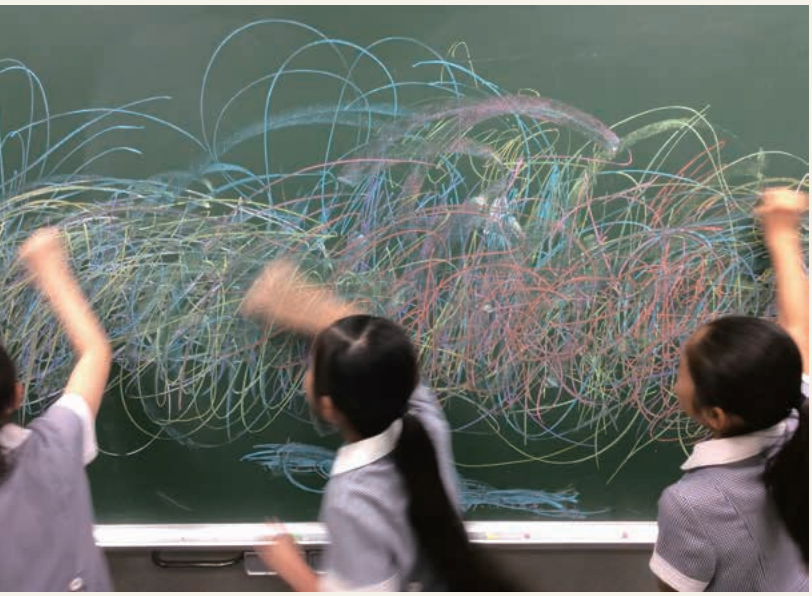
上／開学30周年記念行事 池田学長式辞
下／記念コンサート 演奏：東北ユースオーケストラ

朝日教育会議「教育格差を超えて未来をつくる」
於 ベルサール六本木グランドコンファレンスセンター
上／（第1部）基調講演 脚本家 中園ミホさん
下／（第2部）パネルディスカッション
※採録記事が「朝日教育会議2019」のWebサイトに掲載されています。

休み時間の図工室

図画工作科教諭　関 隆弘

小学部には、1日に2回長い休み時間があります。2校時目と3校時目の間（20分休み）と、給食後の5校時目が始まるまでの間（昼休み）のそれぞれ20分間ずつです。校庭で遊べる時は、外遊びを楽しむ児童が多くいますが、みんなが外遊びを好むわけではありません。室内で過ごすことを好む児童も少なからずいます。そんな室内で過ごすことを好む児童たちの要望もあり、2回ある長い休み時間に図工室を開放しています。私自身小学生の時、休み時間には外で遊ぶことしか考えていなかったので、図工室に行きたいと考える児童に新鮮味を感じました。図工科では、多感な時期にある児童たちが、造形活動を楽しみ自らの表現を模索することで、「想像力」を育み、「創造力」が形成されればと思って取り組んでおります。ですから、「何か」を描きたい、「何か」をつくりたい、とにかく「何か」をしたい児童たちが集まってくるのは大歓迎です。ただ単に友だちとのおしゃべりを楽しみに来る児童もいますが、それも一応歓迎です。休み時間のために、特別に用意してある材料などはありません。小さくなったチョークや普段から置いてある折り紙や画用紙・工作用紙の切れ端、授業で使用し余った材料などを使い創意工夫して造形活動を楽しんでいます。危険なことをしようとしている時、片付けがいい加減な時などは指導しますが、児童にとっては貴重な休み時間ですので、基本的には口出しはせず、見守るようにしています。そうすることで、リラックスできる空間となるよう努めています。実際、児童たちの活動は、「造形遊び」そのものです。



（写真①）アクションペインティング

「造形遊び」とは、子どもが材料や場所などと出会い、それに体全体で触れ合うなどして、自分の感覚や行為などを通して形や色を捉え、自分で目的を見つけて発展させていく子ども主体の活動です。黒板を埋め尽くせと言わんばかりに描く児童たち（写真①）は、さながら抽象表現主義の代表的な作家ジャクソン・ポロックのようです。本人たちは、「ストレス発散だー」と、ただめちゃくちゃに描いていました。紙工作をする児童たち（写真②）は、あれこれと相談しながら「さんかく学校」なるものを楽しそうに制作していました。明確な完成形があるわけではなく、どんどん作品が大きくなっていきます。こちらとしては、持ち帰りのことなどが心配になってしまいますが、本人たちはそんなことはお構いなしです。このふた組の児童たちはそれぞれに「何か」を感じ、求め、それを表現しようと必死な様子でした。完成させることが目的ではなく、この「何か」を表現しようとする行為、プロセスに意味を見出していたのだと思います。日頃の授業の中でも「造形遊び」的な要素は垣間見られますが、休み時間のそれは、子どもが本質的に持っている「造形遊び」の力を強く感じさせてくれる時間なのです。

最後に20世紀美術を代表するパブロ・ピカソの言葉をご紹介したいと思います。「子どもは誰でも芸術家だ。問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうかだ。」

上／（写真②）さんかく学校
下／折り紙

学院創立135周年 大学開学30周年記念行事

東洋英和女学院は2019年度に学院創立135周年、大学開学30周年を迎えました。創立記念日である2019年11月6日（水）には、全学院の教職員が中高部新マーガレット・クレイグ記念講堂に会し、来賓の方々にもご臨席いただき、記念講演会「近代日本における女子教育と東洋英和」を開催いたしました。

基調講演 グラック教授「世界を変える女子教育」

基調講演では、日本近現代史研究の第一人者であるコロンビア大学歴史学部教授のキャロル・グラック氏（先生のプロフィール、関連記事は本誌5〜6頁をご覧ください）に、「世界を変える女子教育 Educating Women, Changing the World」と題してお話しいただきました。グラック先生はアメリカの名門女子大学であるウェルズリー大学のご出身であり、ほぼ同時期の19世紀末に誕生し、同じく女子校である東洋英和の歴史を交えながらご講演くださいました。

キャロル・グラック教授

19世紀に世界的な広がりを見せた女子教育は、各国で驚くほどの共通性を持っており、よき妻、よき母親となり、よい家庭を築くことを通じて、国家に貢献することが期待されていました。

同時に、ウェルズリー、東洋英和などの女子校の創設者たちは、若い女性の個人としての成長、社会への貢献を教育の目的としていました。そこで教育を受けた女性たちは、新たな女性の生き方、在り方（IS）を切り開き、その結果、女性の在るべき姿（OUGHT TO BE）も変革してきたのです。

現代においては、女性を教育することが発展途上の国において、最も社会的、経済的な発展に寄与することが多くの研究で指摘されています。女性が活躍することで、社会の在り方（IS）が変わる。さらに、あるべき社会の姿（OUGHT TO BE）を自ら考え、行動していくことは私たちの責務であり、その積み重ねが世界を変えることにつながる。だからこそ女子教育は重要であるという、力強いメッセージを寄せてくださいました。

パネルディスカッション「そして、東洋英和の役割 グラック教授とOGが語り合う」

左から彦谷貴子氏、キャロル・グラック氏、村岡恵理氏

つづくパネルディスカッションでは、グラック先生とともに、東洋英和の卒業生であるコロンビア大学政治学部准教授の彦谷貴子氏（1986年高等部卒）をモデレーターとし、同級生で作家の村岡恵理氏（1986年高等部卒）にご登壇いただきました。

村岡氏は、祖母である村岡花子氏の評伝を執筆するにあたり、改めて学校の歴史を学び、素晴らしい学校に自分は在籍していたのだと実感した体験から、歴史を知ることの意義を語りました。そして、村岡氏、彦谷氏はともに、女子校で学ぶことによって、多感な時期に、ジェンダーバイアスから解放され、すべてを女性だけで行い、どんなことにも挑戦できたことで、自分の意志で選択し人生を切り開いていく姿勢が身についたと語りました。それを受けてグラック先生は、在学当時にはわからなかった女子教育による恩恵、女性だけの教育環境だからこそ多くの優秀な卒業生を輩出し続けている母校への思いを述べてくださり、女子教育の意義を問う周年の機会に、大きな示唆を与えてくださいました。

記念講演会後は国際文化会館にてレセプションを行い、それぞれのご来賓よりあたたかい祝辞を頂戴し、中高部合唱部が校歌を披露するなど、周年の時祝う、和やかな時間が与えられました。

学院創立 135 周年　大学開学 30 周年記念行事の詳細な記録については、後日冊子や Web 上にてご報告する予定です。

桜プロジェクト植樹 5周年記念ツアーを終えて

（2019年5月1日～6日）

学院評議員・元同窓会長　松本 幸恵

カナダから遥々海を渡った学院創立者ミス・カートメルをはじめとする140余名の婦人宣教師のお働きに感謝を届けた〈桜プロジェクト〉。

植樹から5年を経た桜の季節にカートメル先生の生誕地ソロルドのカートメルウェイとハミルトン市ダンダスのセンテニアル公園を再訪する時が与えられました。

学院、楓の会のご協力をいただき、令和の特別連休にも助けられ参加者11名はそれぞれの想いを胸にカナダを訪ねました。

寒冷地にあっても樹は立派に成長し、伸びた枝の沢山の蕾は私たちの到着を待って次々と美しく開き始めました。お世話くださる方々、地域の人々も毎年桜を楽しみにされていると伺い嬉しくなりました。

植樹の時から現地での桜守を自任くださる有賀誠一牧師御夫妻、カートメル先生のご親戚の方々、教会関係者や現地の皆様のお支えで〈ありがとうの桜〉は私たちの感謝の想いを伝え、改めて「敬神奉仕」を実践された勇気ある婦人宣教師のお働きをカナダの人々にも伝えていました。

両地の心のこもった歓迎と交流を通して、カナダと東洋英和の友好が末永く受け継がれていく事を皆様と共に祈り願いました。

（関連記事）
史料室だより
NO.93 P.6～P.7

モンゴメリが夫と仕えたリースクデール教会での特別礼拝

有賀誠一牧師によるフルートの伴奏で校歌を披露

日加友好90周年に、赤毛のアンの島にて

（2019年8月27日～29日）

村岡 恵理（1986年高等部卒）

昨年の夏『赤毛のアン』の故郷、プリンス・エドワード島に於て日加友好90周年の行事が開催されました。日本から高円宮妃久子様がお見えになるということで島じゅうが祝福ムードに包まれました。そのオープニングともいえる催しで、スピーチをさせていただきました。タイトルは「Anne and Hanako: the story of friendship between Canada and Japan」。日本とカナダが政治的に関係を結ぶ45年も前に東洋英和は創立されています。そこで婦人宣教師から教育を受けたひとりの女学生がやがて翻訳家となり、第二次世界大戦中、カナダ人の友人や恩師に友情の証を立てるような思いで『赤毛のアン』を訳了したことをお伝えしました。

拙いながらも大役を務めることができた陰には、カナダ政府観光局勤務の半藤将代さん、コロンビア大学准教授の彦谷貴子さんという、ふたりの優秀な同級生のサポートがありました。

英和は今も昔も世界に通用する人材を輩出しています。10年後には日加関係は100周年を迎えます。その折は、ぜひ中高部や大学の在学生に親善の使者を務めていただきたい。そう思いました。

左から元駐カナダ日本大使石兼公博夫妻、村岡恵理・美枝、モンゴメリのお孫様たち

（左）彦谷貴子氏、（右）村岡恵理

日曜学校・教会学校で活躍する卒業生【Part 1】

日本基督教団 **滝野川教会**

飯島 慶子 先生

強く、また雄々しくあれ

８時50分礼拝堂。教会学校教師とおしゃべりをする子、教会探検をしている子、「今日の分級はなにするの？」と聞いてくる子。どんどん子どもたちが集まってきてにぎやかになっていきます。そして９時。教会学校の礼拝から１週間が始まります。礼拝堂いっぱいに讃美の歌声が、主の祈りが響きます。

滝野川教会は学校法人聖学院と深いかかわりがあり、出席する子どもたちの多くが聖学院の園児、生徒です。幼小科は毎週約40名が礼拝に通ってきます。この他に保護者の方も多く礼拝に出席してくださいます。その中から洗礼へと導かれる保護者の方もあります。何よりの喜びです。

初めて私が教会を訪れたのは中学部１年の時。英和に入学し、教会学校礼拝の出席をすすめられ、家から徒歩５分の教会に行ったのが始まりでした。それが滝野川教会です。教会学校を卒業し、大人の礼拝につながり、高等部３年のクリスマスに洗礼を受けました。そこから教会学校教師としての奉仕が始まりました。標記の聖句は高等部卒業式での祝祷時の派遣の言葉です。このみ言葉に押し出され、今の私があります。「主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」（ヨシュア記１章９節）――どんな時も神さまが共にいてくださる喜びを英和で知ることができました。この喜びを教会学校に集う子どもたちにも伝えていきたいと願っています。

1989年短期大学英文科卒（中学部より）。高等部３年のクリスマスに日本基督教団滝野川教会にて受洗。1994年教会学校時代から一緒だった教会員と結婚。教会学校は息子と、やはり高等部卒の娘と共にご奉仕している。現在は教会事務員、東洋英和女学院大学宗教センターに非常勤で勤務。

日本基督教団 **白金教会**

柿野 滋子 先生

土の器を用いてくださる神様

クリスチャンの母の意向で、私は幼少期から教会学校に通い、教会付属の幼稚園を経て東洋英和の小学部に入学しました。気づいた時には周りの大人はクリスチャンだらけ、礼拝・お祈りが当たり前の毎日をすごしていました。成人後は東洋英和に就職することが許され、教会で出会った夫と結婚するに至り、まさに私の人生は神様に囲い込まれた感じでした。小２で父が亡くなった時は、江良顕三郎部長先生に「どんな時でも神様が見守ってくださるから大丈夫」と励ましていただき、小４でクラス内が少し荒れていた時は、加藤道夫先生に「イエス様ならどうなさるかを考えることが大切」と教えていただきました。中２で受洗が早すぎるのでは？と悩んだ時は、佐藤順子先生も、当時の白金教会牧師・浅原進先生も「受洗はゴールではない。スタートですよ」と背中を押してくださいました。こうして折々に神様からのお導きをいただきながら、ともすると怠けそうになるお互いを励まし合って、私は夫と共に教会生活を続けてきました。神様はこれほどまでに囲わなければ迷い出てしまう、弱く脆い土の器の私を用いてくださり、今も素直で純粋な教会学校生徒と、元気で心優しい英和生と共に、神様の愛の中で過ごす機会を与えてくださっています。感謝です。私が神様からいただいた沢山の光り輝く恵みを、今後も私の欠けやヒビを通して、教会学校や英和の生徒たちに少しでも伝えることができたらと願っています。

1983年高等部卒（小学部より）。1978年日本基督教団白金教会にて受洗。早稲田大学第一文学部史学科卒業。1987年から1994年まで東洋英和女学院中高部社会科専任教諭。1999年から同学院中高部非常勤講師。2016年から同学院中高部専任教諭に就任し、現在に至る。２人の娘も中高部卒業生。

新約聖書に、イエスに祝福してもらおうと人々が子どもたちを連れてきたことが記されています。宣教といやしで多忙なイエスを気遣って弟子たちは彼らを追い返そうとしますが、イエスは子どもたちを招き、抱き上げて祝福されます（マルコによる福音書 10 章 13 ～ 16 節）。
イエスがなさったように、今も教会は子どもたちを招いています。この子どもたちに最前線で福音を宣べ伝えているのが各教会の日曜学校・教会学校です。現在、信徒として信仰生活を送りながら日曜学校・教会学校教師として活躍している卒業生が何人もいます。それらの卒業生をご紹介します。

日本基督教団 **西片町教会**

白井 愛子 先生

良いものみな神からくる

西片町教会で受洗して 20 年、教会学校教師としてのご奉仕も 19 年になります。高等部を卒業して 20 年以上経ってからの受洗でした。偶然にも受洗のきっかけは、中高の同級生山本香織牧師（現小学部長）と西片町教会会員であった英和の先輩のお母様でした。そのように、私にとって英和はとてもたいせつな存在です。今まで多少なりとも私が評価されてきた“良いもの”はみな英和で学んだこと、得たものであったように思います。私の根っこの部分にいつも東洋英和がありました。「敬神」・「奉仕」の二つの言葉に、知らず知らずのうちに支えられていました。

西片町教会学校には東洋英和を含むキリスト教学校の園児、児童、生徒が通ってきます。保護者の方々もご一緒に礼拝を守っています。しかしいずこの教会学校も同じ課題を感じていると思いますが、それまで熱心に通っていた生徒たちが高校を卒業すると同時に教会学校も卒業してしまうことは、私たち教師の大きな悩みのひとつです。ただ、そのとき私は自分自身のことを考えて、ほんの少し慰めを得ています。教会から離れていた時期も、神さまは私をとらえてくださったことが、今はよく分かります。だから私は帰ってきました。私たちが教会学校で蒔き続けている種の実りがいつかは分かりませんが、「陽を輝かせ、雨を降らせ、ただ神だけが　育てられる」ということを信じて、毎週日曜日の朝、教会学校生徒を迎えています。

1975 年高等部卒。1999 年 4 月日本基督教団西片町教会にて山本裕司牧師より受洗。現在大学非常勤職員。

日本基督教団 **中目黒教会**

本田 愛子 先生

Good（グッと）Cool（くる）おもしろ CS

1953 年東洋英和小学部に入学。短大英文科卒業までの 14 年間在籍しました。英和で学び育てられ、教会でも育てられたことが今につながっています。現在 CS 幼稚科の担任をしておりますが、教会学校校長や CS の教師、中学生キャンプリーダーなどを通して、まず自らがみ言葉に感動し、み言葉にあーそうだと頷き、心温かくなることで、嬉しい思いや楽しい気持ちが子どもたちに伝わっていくことを教えられました。その中で育まれた紙工作や子どもたちとの遊びを通して、幼稚園教師や CS 教師たちへの執筆や講座の活動にも当たらせていただき、大きな勉強になりました。また NCC（日本キリスト教協議会）や日本基督教団東京教区教育部の働きに加わる機会を与えられ、ミッションスクールと教会とのつながりについて学ぶ恵みをいただいています。

幼稚科は保護者も一緒です。可愛い小さなお友達との時を喜び、保護者には毎週聖書の短いお話やゲームなどをお配りして、親子でみ言葉に触れる機会を持ってほしいと願っています。東洋英和での毎朝の礼拝、夏の追分や野尻湖でのキャンプが子どもたちとの交わりの元気の素になっていると感じています。

東洋英和での日々の一つひとつが、その時は気づかなくても実に大きな包容力で包み込んでくれて、じっくりと育ててくれていたのだと、胸がいっぱいになり、そのことを深く神様に感謝いたします。

1967 年短期大学英文科卒（小学部より）。ペーパークラフト作家、料理研究家。50 年以上教会学校の教師として子どもたちのクラスを担当。教会や幼稚園、教区の教師研修会やアバコ講習会などで紙工作やクラスの活動などについて講師を務め、教師のための機関誌などで紙工作や料理のページを担当。著書：『愛子さんのパーティー・レシピ』（日本キリスト教団出版局）。

教員紹介

Kei Mikami

英和の森と共に未来を拓く

大学
人間科学部
保育子ども学科
三上 慧 講師

筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士（芸術学）。高校・短大・大学にて美術・彫刻・幼児造形などの授業を担当し、2018年東洋英和女学院大学に着任。造形表現に関わる授業を担当。趣味は美術鑑賞・森林浴。秋田県出身。

英和の森の自然遊び（もりっこ）に娘と参加

―専門分野と現在の研究テーマを教えてください。

専門は彫刻です。大学・院生時代に、土をこねたり、木や石を彫ったり、金属をたたいたりして全身で素材に向き合った三次元での制作経験が、その後の美術や幼児造形の指導にとても役立っています。木彫の制作・研究を重ねてきた流れから、現在は木育（もくいく）を研究テーマに据えて、五感で自然に触れる体験を重視した保育者養成の授業のあり方を探究しています。

―授業で大切にしていることは何ですか？

制作が中心になりますが、結果であるモノよりも、モノやものづくりを通して世界と関わろうとする子どもたちの姿（体験内容に応じた心の動き）について考える視点を大切にしています。造形遊びが子どもの心をつくる一助となる可能性を踏まえ、まずは保育者志望生たちがいろいろな素材と触れ合い、自ら心を動かす経験を通して子どもたちに温かく柔らかく寄り添えるような存在になることを期待しています。

―木育について聞かせてください。

「木育」は、食育と同時期に北海道で生まれた新しい教育概念・活動です。子どもを始めとする全ての人が「木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと」（北海道木育推進プロジェクトチーム2005）と唱えられる一方で、林野庁（2007）は、木材に対する親しみや木の文化への理解、材料としての木材の良さや利用の意義を強調しています。現在、地域や学校・企業により木育の考え方や取り組み方はさまざまですが、私は、学生・子どもが英和の森の樹々や竹林の存在について知り、手で直に触れながら温もり・香り・音・色・形・模様などを楽しみ森の命を感じる中で、自然と共存する関わり方について身近に考え、生きる力を育むことを望んでいます。英和に就任してから、大学の森にたくましく生息する多くの樹々・植物に出会い、本学で木育に取り組みたいという気持ちが芽生えました。

―英和生にメッセージを！

自然と直に触れ合える時間・空間が本キャンパスにはあります。校門に着いたら、イヤホンを外し、森の緑に目や耳を傾け、風を肌に感じながら歩いてみてください。自然豊かな大学で自分と向き合い、仲間と語らい、自律的・協働的な学びを通して専門性・実践性を養い、時代を生きる女性として誇りを持って成長されることを願っています。

▶▶▶ 学生からのメッセージ

人間科学部保育子ども学科３年
（左）伊藤 真紀さん
（右）武藤 明日香さん

三上先生は造形に関することはもちろんのこと、日常生活の悩みまで相談にのってくれる優しい先生です。先生の授業は、身近なものを使って制作を行ったり、模擬保育などの実践的な内容が多いことが魅力です。子どもたちと関わる機会に、学んだことをすぐに使えるため活用しています。また、作品の完成形だけではなく過程の大切さも教えていただいています。

Eriko Oki

子どものつぶやきに耳を傾けて

東洋英和幼稚園
大木 絵梨子 教諭

聖心女子大学文学部教育学科初等教育学専攻にて幼稚園・小学校免許を取得。2013年より東洋英和幼稚園に着任。現在は年長組のもり組担任。好きなことは読書と踊り。

—幼稚園教諭になった理由を教えてください。

私の母が幼稚園教諭でした。そのためか、自然と幼稚園の先生になりたいと子どものころから思うようになりました。ケーキやさん、生き物博士、サーカス団員、夢はほかにもありましたが、ずっと思い続けていたのは幼稚園の先生でした。今、幼稚園で小さな子どもたちと過ごす毎日がとても楽しいです。

—子どもと楽しんだ絵本は何ですか？

子どもたちと楽しんだ絵本のひとつは、「おおかみと七ひきのこやぎ」です。昔からある絵本ですが、皆大好きです。この絵本を読むと劇遊びをしたがり、一番人気の役は七番目のこやぎです。繰り返し楽しむうちにセリフや登場の仕方が工夫されていき、黒い服を着て大道具係をやる子どもも出てきます。それぞれが自分のやりたい役で劇をしており、子どもたちと繰り返し楽しめた絵本でした。

—最近の子どもたちとのエピソードについて教えてください。

レインスティックという楽器があります。礼拝の際に奏楽として使ったのですが、子どもたちはとても興味を持っていました。「波みたいな音だね」「中に貝殻が入っているのかな」と興味津々。この楽器を作りたくなりました。ペットボトルや豆、ボタンなど音が出るものを用意しておくと、レインスティック作りが始まりました。その後実際にレインスティックの中身を見てみると、竹串のような細い木の棒がいろいろな方向から刺さっており、そこから豆が落ちていい音を作っていることがわかりました。こうなると、子どもたちはより本物に近いレインスティックを作りたくなり、ペットボトルに竹串をたくさん刺したり、「長くつなげると音が長くなるね」とペットボトルをつなげたりして鳴らしながら音を確認し、黙々と作っていました。皆の前で音を聴かせてみたくなったり、そこから自然物を入れてみよう、と石や葉っぱを入れて楽しんだりしていました。

長い楽器がレインスティックです。

—休日はどのように過ごしていますか？

最近は飼い始めた犬と過ごすことが癒やしになっています。マルチーズですが、やんちゃでいたずら好き、ずっと遊んでいる元気な子です。カーテンをひっぱり、ごはん皿をひっくり返し、目が離せず手を焼いています。また、少し前まではフラメンコをずっと続けていました。今は忙しくお休みにしていますが、また機会があったら始めたいです。

▶▶▶ 同僚からのメッセージ

東洋英和幼稚園
佐渡 いずみ教諭

大木先生は、明るく想像性豊かで、踊ることが大好きです。子どもたちに慕われ、保護者からも信頼されています。いつも計画性を持って仕事に励み何事にも真摯に取り組んでいます。また、子どもたちの楽しい話はもちろんのこと、愛犬育ての苦労話や、食べ物の話で私たち同僚を和ませてくれます。先生のさまざまな賜物を感じながら一緒にお仕事をしています。

東洋英和楓の会主催

『パイプオルガン・ソプラノ コンサート』

東洋英和楓の会主催の「パイプオルガン・ソプラノコンサート」が2019年11月23日（土・祝）14時より、新マーガレット・クレイグ記念講堂にて開催され、雨天にもかかわらず300人を超える参加者が集まりました。

今回のプログラムは、本学院高等部卒業生二人による演奏です。前半は、日本を代表するオルガニスト今井奈緒子氏のパイプオルガン演奏でした。華麗で重厚なバッハの作品、しっとりと歌いあげるブラームスの作品、あたかもオーケストラの響きを想像させる神々しいメンデルスゾーンの作品を見事に演奏され、観客はその豊かな響きと音色に酔いしれていました。

後半は、新進気鋭の若手ソプラノ歌手横山和美氏の独唱でした。オペラ「椿姫」より情熱的なアリア、抒情的な日本歌曲、繊細なドイツ・リートを横山美恵氏（和美氏の母）の伴奏にのせて歌われました。また、合唱部との共演「落葉松」は、深みある合唱部の声と、横山氏の艶やかな美声が会場に響き渡りました。

お二人とも自身による解説を交えての演奏で、観客はより深く音楽の世界に引き込まれました。

最後に、荘厳なパイプオルガンの伴奏で、会衆一同「ハレルヤ」を高らかに合唱しました。まさに神様を讃える喜びに満ち溢れたコンサートでした。

1. 今井奈緒子氏によるパイプオルガンの演奏／2. 横山和美氏によるソプラノ独唱／3. 横山和美氏と合唱部の共演／4.（左）横山和美氏（右）今井奈緒子氏

東洋英和楓の会・学院同窓会共催イベントのお知らせ

『東洋英和女学院出身のタカラジェンヌによるトークショー≪ EIWA ジェンヌ！☆≫』

日時　2020 年 6 月 6 日（土）14 時開演
場所　中高部新マーガレット・クレイグ記念講堂
料金　無料
出演　日向 薫、越はるき、成瀬こうき、純矢ちとせ

「東洋英和より宝塚音楽学校に入学し、宝塚歌劇団員として憧れの≪宝塚レビュー≫の世界に飛び込んだ 4 人によるトークショー。宝塚の魅力と、多くのタカラジェンヌを輩出している東洋英和のパワーに迫ります。歌劇団 106 年の歴史プチ講座と共に、感謝をこめてお送りします。皆様にお楽しみいただければ幸いです。」 日向 薫

日向 薫（ひゅうが かおる）

六本木生まれ。幼稚園と中学部から高等部 1 年までを東洋英和で過ごし、宝塚音楽学校へ。1976 年初舞台。1988 年～1992 年まで星組男役トップスターとして「ベルサイユのばら」「戦争と平和」等、数々の名舞台を残し、「紫禁城の落日」ラスト・エンペラー溥儀役で退団。以後、ステージを中心に活動。2020 年 3 月～5 月「コルチャックと子どもたち」出演予定。二松学舎大学、十文字学園女子大学で「タカラヅカ研究」の講義を担当。また、健康運動指導士の資格を活かし健康講座≪ VIVACE ≫主宰。劇団ひまわりブルーシャトル所属。
http://www.blue-shuttle.com/talent/hyugakaoru

申込方法　〔同窓会会員の方〕2020 年 4 月中旬にお送りする同窓会総会案内ハガキにてご案内いたします。
〔同窓会会員以外の楓の会会員の方〕東洋英和女学院ホームページより、Web 登録フォームにてお申し込みください。
申し込み期間は、5 月 13 日（水）～ 29 日（金）を予定しています。

貴重なご意見をいただきました

『2019 年度東洋英和楓の会役員総会』

2019 年 6 月 22 日（土）15 時 30 分より、楓の会役員総会が中高部集会室にて開催されました。総会では、2019 年度年間事業計画、2018 年度会計報告および 2019 年度予算、役員の選任等についての報告・提案が事務局より行われ、審議の後すべてご承認いただきました。質疑応答では、役員の方々から楓の会に対する貴重なご意見を頂戴いたしました。

東洋英和楓の会　役員一覧（敬称略）　2019 年 12 月 1 日現在

会長　増渕　稔

顧問　飽戸　弘　吾妻　國年　石井摩耶子　大木　英夫　大宮　溥　金子　栄一　金子　尚志　木村　太郎　近藤　勝彦　田村　哲夫　富田　浩安
中村　福助　中村メイコ　西川　扇藏　橋本　五郎　鳩山友紀夫　樋口　久子　深町　正信　藤井　裕久　藤井　良昭　宮内　義彦　宗國　旨英
村上陽一郎　森田　一　横山　巖

副会長　池田　明史　石澤　友康　大瀧　知子　楠山眞里子　久保田まり　小久保康之　佐藤　智美　鈴木　齊　堤　加壽美　西田　哲也　望月　克哉
山本　香織　渡辺　和子　（学院）
亀岡さやか　澤田　初恵　菅井　徹郎　鈴木美由紀　前田利津子　山北　千世　（同窓会）
安部　眞一　大貫　純一　小泉　光人　坂本　功　髙松　良樹　牧　健太郎　村松　康雄　（後援会）
阿川佐和子　小川　晴也　倉田　敬子　神津　十月　須永　達雄　鳥飼玖美子　松岡　裕子　山尾　庸久　山本 泰人　（卒業生）

監事　小林　敏　横山　巖

役員　阿久澤紀雄　石津　珠子　伊勢紀美子　太田　良子　大伴　栄子　角藤比呂志　加藤　道夫　倉林　義正　黒岩　徹　黒川　信也　小坂　和子
小林　敏　佐藤　順子　鈴木　法子　新冨　英雄　滝澤　三郎　塚本　榮一　辻村江太郎　露木美奈子　寺澤　東彦　土橋　克子　中岡　望
中林　隆明　浜辺　達男　早川　史郎　林　喜久夫　原島　正　増田　弘　三橋　利光　村上　哲朗　望月　敏弘　森高ホサナ　柳沢　昌義
山岡　清二　湯浅　慶　（学院・旧教職員・大学名誉教授を含む）
青木サエ子　池田　廣子　石川　和子　糸魚川規子　岩崎　君子　上原　幸枝　魚躬　聡美　大川　薫　大月　陽子　岡田　苑子　岡田　弓子
奥村　友子　小野田淳子　片山　節子　神谷　邦子　木村　祥子　楠本　礼子　久保田悦子　小谷美智子　後藤　淑恵　清水　有香　杉浦　智恵
須藤　倫子　ソボトカ佐和子　立原　和枝　田中美佐子　田中由美子　田中百合子　手島　弘美　鳥羽　郁子　中尾　有子　中台　恭江　中村千賀子
新村麻里奈　信國　隆裕　橋本美那子　長谷川充子　林　聖子　平尾　良子　福田　知子　古澤不二子　細川　恒子　堀口由美子　松井　恭子
松本　幸恵　三方奈々子　宮下　信子　村山　節子　森　敦子　森　弥生　安田　節子　山崎　英子　渡邊　敬子　（同窓会）
赤川　公男　浅見　新一　安部　猛彦　安藤　繁　石川　栄　伊藤　裕基　上原　正雄　小田　博　香月　保　金森　三浩　神谷　直彌
菅野　庄一　木内　二郎　後藤　浩　小林　宏　小林　寿成　小森　秀人　佐藤　明弘　鈴木　明弘　瀬下　明良　髙橋　展俊　坪井　昌造
遠山　正道　櫟本　健夫　花岡　健司　藤波　勝久　山口　章　若井　勝廣　（後援会）
龍　庸之助　（小学部父の会）
石井和佳子　石原　潤　今井　哲哉　大野　昭彦　酒匂　義倫　富沢　明男　中村　芝翫　西川　均　西川　祐子　長谷部信一　藤田　大輔
保母　敏子　水野　真紀　村岡　恵理　和田　美範　渡辺　一寿　（卒業生）
加藤久美子　木下みか子　星野　恭子　（母の会）
市橋　佳子　大軒　京子　近藤　秋子　塚本　明子　西村　澄子　牧野　安子　（学院関係団体）
五十嵐素一　出光　昭　綛田　清隆　加藤　哲康　柴生田敦夫　鈴木　三彌　髙際伊都子　長山　信夫　野村　稔　張田　眞　松田　博青
宮崎　露苳　柳田　幸男　渡辺　洋一　（学院関係者）

英和生の活躍、ご紹介します！

英和での生活が私を小説家に育ててくれた

英和での日々が、小説家としての素養を育んでくれました。特に、生徒たちの個性を丸ごと受け入れてくれる懐の広さと、「一生涯の友」たちとの出会いが、今の私を形作ってくれたと言えます。

幼稚園の時には、一人で空想することが好きだった私を、先生方は温かく見守り、その個性を尊重してくださいました。

小学部へ上がってからは、自分で書いた絵本を友人たちとよく見せ合うようになり、彼女たちのすすめで、給食の時間に流す放送劇の脚本を書く機会にも恵まれました。自分の考えた話を「面白い」と言ってもらえることが嬉しくて、私は夢中になって、さまざまな物語を紡ぎ続けました。

中学部に進学し、最初の夏休みに出された宿題―「小説を書く」。これが、その後の私の人生を決定づけました。私が書いた原稿用紙10枚程度の物語が「道（ことば）」に掲載され、友人のみならず、保護者の方々からも好評をいただいたのです。この喜びが、将来、小説家になるだろうことを、私に予感させました。その直感は正しく、博士課程在学中に小説の新人賞を受賞し、作家デビューを果たすことができました。

拙著は、ありがたいことに、小中学生の間で、特に支持いただいています。「5分後に意外な結末」シリーズは、朝読で中学生に最も読まれている小説に選定され、「悩み部」は、複数校の入試問題に採用いただきました。

高校生が主役の小説を書く時、私はよく英和での日々を思い出します。英和での体験が執筆に与えた影響は大きいと感じています。

若い時の読書は、多様な価値観と出会う機会を読者に提供し、その後の人生に大きな影響を与えます。今後も「麻希一樹の本を読んでよかった」と思っていただけるよう、精進していきます。

麻希 一樹（まき かずき）

東洋英和幼稚園・小学部・中高部卒業。東京大学卒業・東京大学大学院修士課程修了後、東京大学大学院博士課程在学中に作家デビューし、現在に至る。著作に『5 分後に意外な結末』シリーズ（共著、学研）、『悩み部』シリーズ（学研）、『「未完成」なぼくらの、生徒会』（KADOKAWA）などがある。

史料室レター 28

ミス・ハミルトンの勇気
―戦時中の日系人支援―

ミス・ハミルトンといえば、戦前には東洋英和の第15代・17代校長を務め、制服・校章・学校標語・校旗・校歌を制定し、戦後も短期大学保育科の伸展に貢献するなど、学校の基盤を築き上げた業績で知られています。

先生は太平洋戦争勃発後、カナダに帰国せざるをえなくなりますが、カナダでの先生の動向については今まであまり知られていませんでした。ところが、このたびミス・ハミルトンの戦中の日系人強制収容所における教育活動を紹介する番組がNHK ETV特集（日本語版）で放送され、多くのことが明らかになりました。

敵国人となった日本人・日系人への反感が渦巻く母国カナダにおいて、ハミルトン先生が選択した道は、厳冬の地レモンクリークの収容所に赴任し教育の機会から見放された日系人の高校生のために奉仕することでした。

神のもとでの国際平和を唱え続け、世界のなかで虐げられた人々に寄り添う、まさに「敬神奉仕」を実践したハミルトン先生の勇気を、現在の私たちは持ち合わせているでしょうか。学院創立135周年、大学開学30周年を迎えた今年度、ハミルトン先生の尊いお働きに思いをはせる機会となりました。

第15代・17代校長　ミス・ハミルトン

- 文中の番組の日本語版はすでに放映されましたが、英語版はNHK ワールド JAPAN On Demand にて 2020 年 8 月 24 日まで Web 上で視聴可能です。NHK WORLD PRIME 番組名「Hope in the Dark」 https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/video/3016050/
- 「史料室だより」No.93 の特集記事で、さらに詳しくハミルトン先生の活動を紹介しています。以下の URL もしくは QR コードからご覧いただけます。https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/
- 史料室 Tel：03-3583-3166 ／ Fax：03-3583-3329　https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/

同窓会より

同窓会 クリスマス礼拝

12月7日（土）同窓会クリスマス礼拝が新マーガレット・クレイグ記念講堂で行われました。前奏を大学オーケストラ部、奏楽・三原麻里さん（東光会）、奉唱・鷲見香林さん（東光会）、山本香織牧師（小学部長）の説教、最後に全員で歌うハレルヤ…心をひとつにしてクリスマス礼拝を守りました。礼拝後は、港区・東洋英和女学院連携事業「村岡花子記念講座」との共催による絵本作家中川李枝子氏の講演会があり、学びの時を持ちました。その後中高部集会室に場所を移し、楽しい「お茶の会」のひと時を持ちました。

【同窓会総会のお知らせ】2020 年 6 月 6 日（土）同窓会総会が開催されます。総会後は楓の会との共催で催事『東洋英和出身のタカラジェンヌによるトークショー』が予定されています。今回の催事は事前のお申し込みが必要となります。詳細は 4 月中旬発送の同窓会総会案内ハガキをご覧ください。

（左）山本香織牧師、（右）司式 小堀滋子さん（東光会）

後援会より

2019 年度後援会総会・役員懇談会のご報告

後援会長　小泉 光人

新・旧の後援会常任役員の皆さん

7月5日（金）に後援会総会が開催され、それに先立ち役員会にて審議可決されました新役員・新常任役員、そして 2018 年度収支決算ならびに 2019 年度収支予算が報告されました。総会では、後援会費から学院に寄付された 1.6 億円のうち 1 億円が学院の経営基盤安定のために設けられた楓基金に組み入れられ、これにより同基金は本年をもちまして 59 億円となり学院財政面で貢献がなされていることが報告されました。また、10 月 4 日（金）には学院教職員の皆様と後援会役員との懇談会が開催され、会員皆様から活発な質疑やご意見が学院側に寄せられました。後援会総会・役員懇談会ともに会終了後には学院教職員の皆様との懇親会が開催され、少子化や学院校地の一部移転問題など学院を取り巻くさまざまな環境の変化がある中、後援会から学院へ会員の声をお届けしつつ、後援会一丸となって学院を支えていく雰囲気が育まれました。

東洋英和女学院 学院報・東洋英和楓の会 会報　楓園　第89号　発行日：2020 年 1 月 31 日
発行：学校法人 東洋英和女学院　東京都港区六本木 5-14-40　Tel：03-3583-3325　E-Mail：koho@toyoeiwa.ac.jp　URL：https://www.toyoeiwa.ac.jp